

タイ仏教僧団の教育制度

タイ国タンマガーイ寺院教育部副部长
タンマチャイ大学設立プロジェクト代表

プラマハタナー・テーシヤタンモー

仏教の僧団の教育ということですが、お釈迦さまの時代から現代まで続いてきました。非常に拡大しているのは仏滅後のことです。仏陀が亡くなられた後で仏教は非常に拡大しています。しかし口伝の伝統で、世代から世代へすべて暗記をしたため当時は書物がありませんでした。三蔵という聖典（律蔵、経蔵、論蔵）があり、三蔵全部を暗記することが難しいので、それぞれの専門家、律蔵、経蔵、論蔵の専門家の系列がありました。

仏教がタイに伝来したのはとても古く、国が成立する前の時代ともいえます。今のタイは一つの国ですが、昔はそこに二つの王朝がありました。一つはランナー王朝、もう一つはスコタイ王朝です。

当時の話ですが、一四七七年に、ランナー王朝の第九代ティローカラート王が、タイ国で初めての第一結集を行いました。仏教聖典、仏陀の教えの編纂の会議、第一結集は仏陀が亡くなられた後ですぐに一回目を行ったのですが、タイでは一五世紀に第一結集を行っていました。

当時、お釈迦さまの時代の第一結集は、昔から口伝ですが、タイでは第一結集の時に書物ができました。そんなに多くはないのですが、一六二七年、ソンタム王、当時アユタヤ王朝第二十四代王（在位は一六一一年～二八年まで）は、仏教学者を招き、経典の写経を、その時も行いました。

当時のタイはビルマと大戦が多く、その時、教育は一時、中止されました。戦争に専念するのですが、教育制度の方が成立していませんでした。

た。もちろん教育はスコータイの時代からありました。

その後、主な支援者の代表は国王であり、どうすれば戦争で相手の命を落とさないで勝てるかという活路を、高僧に相談しました。

もうひとつの王朝はトンブリー王朝といいますが、短かったのですが、アユタヤとスコータイ朝と比べて当時は戦争が多かったです。でも王は仏教を支援してきたことです。

トンブリー王朝のタークシン王はタイ全体を仏教の国だと宣言していました。トンブリー王朝の後、ラッタナコーシン王朝、別名はチャックリー王朝といえます。その初代の王がラーマ一世、今のタイはこの王朝です。現在のプミポン国王はラーマ九世です。第九代王ですが、当時の初代王、ラーマ一世は一七八八年タイ国で第二結集を行いました。

ラーマ三世（在位一八二四年～八一年）は、僧団の検定試験、今の国家試験の制度を初めて確立しました。ラーマ五世は、タイでは「教育の父」といわれていますが、僧侶の仏教学院を確立するために一八八九年にマハータート・ウィッタヤライを設立しました。その後、一八九六年、マハーチュラーロンコーン・ラージャウィッタヤライに改名しました。

そして一八九三年、ラーマ五世は、自らの即位二五周年を記念してタイ文字パーリ三蔵の刊行事業を行いました。こちらのタイ文字パーリ三蔵は今、日本の大学に保管されています。龍谷大学もこの一部をもっています。今、タイの仏教の宗派は二つの宗派があります。マハーニカイ、もう一つはタンマユットニカイです。マハーニカイの方が大宗といい、大きな宗派です。タンマユットニカイの方が小教派です。この二つの宗派がラーマ四世の時に生まれた二つの仏教の宗派ですが、マハーチュラーロンコーンの方はマハーニカイの方の仏教学院です。一八九三年、ワチラヤーン・ワローロット師がタマユットニカイ派の僧侶の仏教学院を創始するためにマハーマクットラーチャウィッタヤライを設立しました。ラーチャが王という意味で、ウィッタヤライは学院という意味です。王がつくった大学ということです。

ラーマ五世の前の時代は、パーリ三蔵を勉強する時もパーリ語で勉強していました。でもその後、ラーマ五世の時、タイ文字パーリ三蔵ができたのでタイ語での勉強ができました。当時のパーリ三蔵を勉強していた時はパーリ語ですが、文字はクメール文字とランナー文字でした。

ラーマ三世の時、成立した国家パーリ試験ですが、その後一九二六年、僧団の仏教教理検定試験が創始されました。

タイと日本の同じところは、寺院と僧侶が社会のリーダーであり、昔からすべての学術もお寺から出たという点です。勉強も教育制度も新し

い学術もお寺からです。タイもでした。お釈迦さまの時代から二〇世紀前半まで、どのようになってきたかを皆さんに紹介しました。これからは現代のタイ仏教僧団の教育制度はどういうものなのかを紹介したいと思います。

最初は僧侶向けの教育制度を紹介したいと思います。現代の僧団教育制度は少なくとも三つに分けられます。一つはパーリ語学、仏教教理学、アビダンマ、サンスクリットではアビダルマ、です。この三つに分けられます。パーリ語学の勉強は、三つの段階があります。初級、中級、上級。ベーシックのコースはパーリ語の文法をしっかり勉強します。そのまま暗記します。一冊の本を文法として暗記し、格変化もすべて暗記します。パーリ語の初級の勉強の仕方です。パーリ文法の勉強をし、その後はパーリ語をタイ語に翻訳することもあります。中級はパーリ語をタイ語に翻訳することもあります。タイ語からパーリ語への翻訳もします。初級はテキストはダンマパダの八巻をパーリ語からタイ語に翻訳し、中級はタイ語をパーリ語に翻訳します。タイ語で出した試験問題を、そのままパーリ語で書くことです。二つの部分があり、韻文と散文の韻文は偈のことで、そんなに長くはないですが、アッタカタールの方もあります。註釈の部分です。

三蔵だけではなく、蔵外文献も中級の段階で勉強しております。その中でも律蔵の部分はヴィバング、僧侶の二百二十七戒を解説するものです。その後は細かい決まりもあります。こちらはヴィバング、こちらはカンダカ。薬の使用方法は薬健度といえます。上級の場合はパーリ語をタイ語に訳することもあります。タイ語からパーリ語への訳もあり、パーリ偈集を作成することもあります。『清浄道論』も学びます。タイ語をパーリ語に訳することですが、中級ではパーリ語からタイ語に訳するものを、上の段階に入ると逆訳にします。

もちろんその中でも、律蔵、経蔵だけではなく、論蔵、アビダンマまでも学んでいます。三蔵や注釈書だけでなく、副注釈書までも勉強しています。そのパーリ偈集の作成もありますが、その他、韻文だけではなく散文までも作成することもあります。パーリ偈集の作成は、この部分のテキストがあれば暗記するだけでいいんじゃないか。暗記することができ、覚えることができたなら誰でも書けるのではないかという疑問があるかもしれませんが、最後のパーリ語の韻文、散文の作成は、説法から試験に出ます。昔の高僧の国王の前での説法、それを記録しました。説法を文章にして試験問題に出した後でそのものをパーリ語に作成することです。

パーリ語学の初級と中級はテキストの決まりがあります。上級の方はパーリ偈集の作成の方は決まった本がありません。今までの文法能力を全部使ってこれをつくります。その審査の先生はタイで管理している大長老会議のメンバーを選んで、試験を審査します。委員会としてその場

で合格かどうかを決めます。

次にパーリ語検定試験の今までの歩みについて話したいと思います。三年に一回、口頭試験を開催します。もちろん戦争があった時はやめませんが、戦争がなくなった後、また三年に一度口頭試験を開催します。そしてその後は初級、中級、上級に分かれて口頭試験をします。一九一一年に口頭試験から筆記試験に変更しました。現代のパーリ語の試験は一〇〇年前からの筆記試験です。今、現在も一〇〇年前からのこの制度を行っています。

次に仏教教理学について紹介したいと思います。仏教教理学の制度は、ある程度、パーリ語学の制度ができ、サンプルを手本に一八九二年、仏教教理学の教育制度を設立して、国家の仏教教理学検定試験制度を創始しました。これもパーリ学と同様に初級、中級、上級に分かれます。これにも仏教教理学とパーリ語学の制度がかかわっています。初級のパーリ語学を受けるのであれば、今の仏教教理学の初級に合格しなければなりません。最初は仏教教理学の初級を合格した後で、パーリ語学の初級の段階に入ります。これからは仏教教理学は何を勉強しているのか、そのカリキュラムを紹介します。

これも初級の場合は四つの科目があり、一つは仏伝、二番目は小論文、三番目は教理、そして四番目は戒律についてです。仏伝は釈尊伝。お釈迦さまの伝記について。小論文は一偈頌。偈の一つの経文を暗記して小論文を書きます。その問題は一つの偈について説明した後で、自分が用意している偈頌集を説明します。この二つの偈がどういう関係なのかをまとめて書きます。教理学の基本的教理、二百二十七戒についてはヴィバンガのところに入ります。

中級の仏伝は釈尊伝記ではなく仏弟子の中の四十人の大長老がどういう人物なのか。例えば、マハーカッサパは出家する前はどのような人物で出家した後、仏教にとってどういう人物なのかを四十人ほどを覚えます。小論文は、中級は二偈覚えます。教理は基本の教理だけでなく、經典そのものを学びます。戒律の方も二百二十七戒のヴィバンガの部分だけではなくカンダカ、薬隄度も学びます。

そして上級はまとめとして、仏伝は釈尊と仏弟子の両方を学びます。また小論文は三偈を暗記します。仏教教理は経藏と注釈書の部分にも入ります。戒律は僧団の法律についても勉強します。小論文のところで、偈の内容を詳しく書かないといけない。

教理ですが、經典の中級と同じように經典の勉強だけでなく、分析しないといけません。その内容は参詣者にどう教えたらいのかまでも勉強

強しないといけません。どの經典が僧侶向けのお経なのか、在家のための経なのか、を区別する能力をもたないといけません。

四番目の僧団法律は、今ではタイだけの特徴だと思いますが、僧侶についての法律もあります。国の憲法、法律、そして僧侶にとっての僧団の法律もあります。僧侶としてはそれを勉強しないといけません。上級の部分は寺の住職向けの試験ともいえます。住職は少なくともこの段階に合格しないといけません。

一九二八年からは一般在家者のための仏教教理学の教育制度も設立しました。また試験の制度も創始しました。僧侶の制度と同様に初級、中級、上級とありますが、内容は簡潔です。今の試験は全国、大人から中学生、高校生までも受けています。その試験を国内だけでなく海外にあるタイのお寺も行っています。日本別院も初めてこの試験を設けました。

そして今までは仏教教理学についてでしたが、これからアビダンマ学についてお話しします。アビダンマ学の方の勉強の系列はビルマ、ミャンマーからの制度で一九三二年に創始しました。当時は正式な教育制度がなく一九八六年、ワットラカン寺院内にアビダンマ・シヨーティカ・ウィッタヤライという正式な教育制度を設立し、全国の寺院にも広めました。そのアビダンマ学のカリキュラムには、二つのコースがあつて一つは基本コースで、もう一つはマスターコースです。基本コースは一般の興味をもっている人のためのコースです、もちろん僧侶も含めて。基本コースは初等、中等、高等のアビダンマ学に分かれます。それぞれの段階には初級、中級、上級があります。全部で九段階です。学習の時間は七年半です。そしてマスターコースはアビダンマ学教師のためのコースです。初等と高等、初級、中級、上級に分けられます。初等アビダンマ学を学んだ者をアビダンマ・カティカといい、高等アビダンマ学を学んだ者をアビダンマ・アーチャリヤと呼びます。アビダンマ学の先生という意味です。最高のレベルです。基本コースの中等の上級を受からないとマスターコースを始めることはできません。この学習期間は六年間です。

最後に仏教の大学についてお話しします。現代のタイの仏教大学は、マハーチュラーロンコーン大学 (MCU)、そしてマハーマクット仏教大学 (MBU)、最後はタンマガイ公開大学 (DOU) です。マハーチュラーロンコーン大学とマハーマクット大学は龍谷大学や大谷大学と同じ、普通の大学ですが、タンマガイ公開大学は今の日本の放送大学と同じようなシステムです。マハーチュラーロンコーン大学はマハーニカーイ派の大学です。仏教学部、十二学科です。十二学科の中は宗教学、哲学、大乘仏教学、仏教学などがあります。仏教学は学問的な勉強だけでなく

く、信仰を含めて勉強していて、アビダンマ学、パーリ語だけの勉強もあります。もちろんサンクリット語学もあります。そしてマハーマクツト大学はタンマユットニカーイの大学です。同じように学部は一つ、宗教哲学部、四つの学科があります。宗教哲学、比較宗教学、仏教学と哲学の四つです。

タンマガーイ公開大学は僧侶も一般の方も勉強しています。タンマガーイ寺院はマハーニカーイ派です。仏教学部だけで、その柱は五つあって人生観、瞑想、仏教教理、仏道、人間関係。仏陀の教え、経典から、タンマガーイ寺院の創立者の教えも含まれています。

それぞれの柱は人生観は宇宙論、輪廻論、業論、成仏論、そして精神論について勉強しています。また瞑想は瞑想の基礎、瞑想実践概論、瞑想の障害と解決法、瞑想実践法、止観修習概論、止（サマタ）と観（ヴィパサナー）の修習について学び、実践法も含まれています。

仏教教理は仏教学概論についてです。あとは応用仏教として、自己啓発、社会平和、仏教経済を、更に仏教史、パーリ三蔵を詳しく勉強することです。仏道は、ブツダの道、仏教徒の道、仏教文化、仏教修行道、沙門、出家修行者の道について勉強します。人間関係については接客マナー、スキル、宗教学、特に比較宗教学も勉強しています。今日はタンマガーイ公開大学の仏教学部長もこちらにいられています。プラマハーウッティシャイ・ウッティシャヨーといいますが、彼も国家パーリ試験第九段、最上級です。

今日はタイ仏教の歴史、そして現代の仏教教育について皆さんに紹介しました。皆さんに紹介することができて光栄に思います。ありがとうございました。

司会 テーシャタンモー師によるご講演を聴かせていただきました。貴重な機会ですので、何かご質問ございましたらご遠慮なくお尋ねください。

質問 私は八十九歳の市井の憲法学者です。二問ご質問いたします。アビダンマ学とはどういうものですか。二番目、サンスクリット語とパーリ語はどういう関係がありますか。

テーシャタンモー タイのアビダンマ学は少なくとも四つのことを勉強しています。心、心所、色、そして涅槃です。アビダンマの勉強ですが、経典と違って、ほとんどは難しいことをいっています。すべてはダンマ、ダルマとは何かを含めて説明しています。たとえば一人の人物がいて、

どういう名前か、その人の心はどういう状態なのかについて研究しています。

パーリ語とサンスクリット語はどのような関係にあるかということです。上座部仏教の伝承ではパーリ語は昔のインドのある地域の言語、その言語はマガタ語で釈尊がこの言葉で皆さんに仏教のことを伝えました。その後はパーリ語だけではなく、他の地域にいくとサンスクリット語で仏教のことを広めました。

質問 お寺の中での瞑想実践について伝統的な上座部における瞑想実践とどういう点が異なっているのか。瞑想実践における特徴が教育にどういう影響をもたらすのかをお尋ねしたいと思います。

テーシャタンモー タンマガーイ寺院が皆さんに紹介している瞑想法は、『清浄道論』の中の四十の法の一つです。それは「十遍」の中の「光明遍」といいます。光をイメージして集中することです。その代わりに仏陀をイメージすることもでき、これは「十随念」の中の「仏随念」といいます。瞑想が教育にどうかかわっていくか。智慧とは戒・定・慧の慧ですが、それには三つの段階があつて、聞、思、修。聞くことによつて智慧がえられる。そして思うことによつて智慧がえられる。最後の段階は修行によつて智慧がえられる。勉強ということは、ただ聞くことだけでなく、思うことだけではなく、実践しないといけない。仏教学の勉強なので瞑想のことを勉強しないのは残念ではないかと思つています。深さもあります。聞くことによつて得る智慧があります。聞いたことと思つたり、考えたりします。もう少し深くなります。最後に修行しないと残念ながら奥までは難しい。メディテーションはもちろん現代の話ですが、能力アップ、気力アップすることは科学も証明しています。瞑想を一つのカリキュラムに入れていきます。パーリ語はシツカー (sikkā) という言葉と、もう一つはイツカー (ikkā)。イツカーは見る、観察する。自らを観察すること、内観です。シツカーのもともとの意味も内観ということではないでしょうか。実践にとつて、シツカー、学ぶということは、自らを見て、もつと鍛えること、修行することが大きなことではないかと考えています。聞く、思うは他の学問には多いと思います。が、修行の方がまだ少ないのではないのでしょうか。その分野は仏教の中にだけあるのではないので、自らを鍛えることもこのカリキュラムとして入れているわけです。

司会 ありがとうございます。大変貴重なお話を頂戴いたしました。こういう直接的な実践的なことまでお聞かせいただけるとは思っておりませんでした。ありがたいことでございます。それではテーシャタンモー先生に対する御礼の思いをこめまして、アジア仏教文化研究センター

長の桂先生よりご挨拶いただきます。

桂 テーシャタンモー先生、ありがとうございます。これまで私たち聞いたことがないタイの教育制度の歴史と現状までお話いただき、大変感激いたしました。龍谷大学も浄土真宗本願寺派という仏教宗派が三七四年前にたてた大学です。今、タイでやっておられる新しい大学設立と同じようなコースを、実は龍谷大学も明治以降の近代化の中でたどってまいりましたので、大変興味深く聴かせていただきました。

私も一つだけお尋ねしたいのですが、仏教教理学の「一偈集」とか「二偈集」はダンマパダから選ばれるのでしょうか。

テーシャタンモー ダンマパダだけでなく、偈の部分があれば、どこの部分でもできます。

桂 ありがとうございます。龍谷大学の本館でまたお話していただけることを楽しみにしております。本日はどうもありがとうございました。

司会 本日は大変貴重なご縁をいただいたと思います。最後にテーシャタンモー先生にもう一度御礼の思いで拍手をお願いいたします。ありがとうございました。